縄 文 時 代 早 期

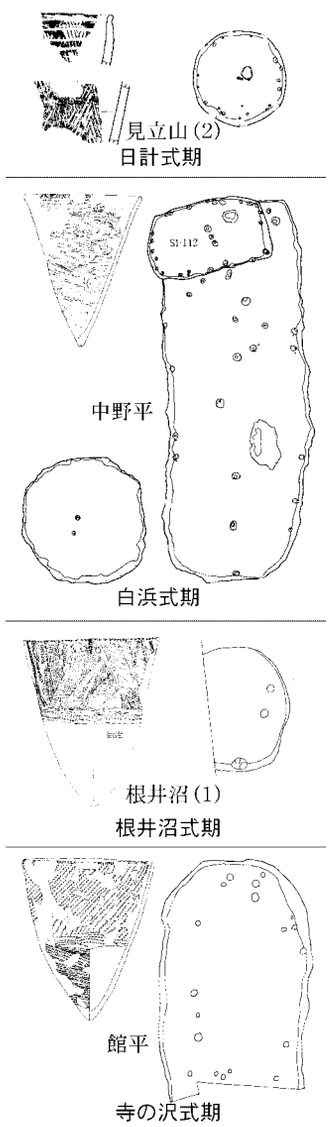
坂 本 真 弓

昭和55年以降、当センターでの縄文時代早期調査遺跡は124遺跡あり、そのほとんどが遺物のみを出土するものである。遺構に関しては、竪穴住居跡・土坑・焼土遺構・集石・貝塚等が検出されている。土坑の中には、「土坑墓」の可能性のあるものや「落とし穴」と考えられるものもある。遺物としては、早期前葉の押型文土器、早期中葉の底部が尖底主体である沈線・貝殻文系土器、早期後葉の底部が平底である縄文系土器とこれに伴う石器・土製品などである。

竪穴住居跡

昭和50年から55年には、まず、八戸市長七谷地貝塚の試掘調査（昭和53年）が行われ、長七谷地２号遺跡等も発掘調査が必要であるという報告がなされた。この試掘調査では早期中葉の竪穴住居跡が１軒検出された。また、これと並行して発掘調査が行われた八戸市長七谷地貝塚（昭和52・53年調査）からは早期末葉から前期初頭にかけての竪穴住居跡12軒が発見された。竪穴住居跡は楕円形のものが多い。中には長軸９ｍの大型住居跡も１軒検出されている。赤御堂～早稲田５類期の大型住居跡を含む集落跡が初めて明らかにされた。また、貝塚の調査も行われ、早期後半から前期前半にかけての動物・植物遺体が多数出土している。また、六ヶ所村新納屋(2)遺跡の調査が行われ、早期中葉から後葉の竪穴住居跡３軒が検出された。 昭和55年から60年には、八戸市和野前山遺跡（昭和56年調査）、八戸市売場遺跡（昭和54・56・57・59年調査）では、早期の竪穴住居跡が多数発見された。和野前山遺跡では、早期後葉の竪穴住居跡が４軒、売場遺跡では早期前葉から後葉の竪穴住居跡29軒が発見された。中でも、ムシリⅠ式期の竪穴住居跡は８軒発見されている。長軸2.6～5.3ｍの円形・楕円形主体で、２軒の住居から灰床炉と地床炉を検出している。この時期の竪穴住居跡は六ヶ所村表館(1)遺跡の１軒以外は検出されておらず、現在のところムシリⅠ式期の唯一の集落跡である。

昭和62・63年には表館(1)遺跡の調査が行われ、早期中葉から後葉にかけての竪穴住居跡が26軒検出された。物見台式期の竪穴住居跡は３軒あり、そのうち２軒は、長軸約６ｍの隅丸長方形・楕円形で、炉は共に灰床炉である。また、赤御堂式期の竪穴住居跡は11軒、早稲田５類期は８軒あり、共に長軸９ｍ代の比較的大型の住居跡を１軒含む。前述の長七谷地貝塚と同様に上北地域においても、当時期の集落跡の一端を示した。六ヶ所村上尾駮(2)遺跡（昭和60・61年調査）の調査が行われ、早期中葉の竪穴住居跡２軒を検出し、内１軒は白浜式期のものである。



早期前葉・中葉の土器と小型・大型竪穴住居跡

平成元年には、下田町中野平遺跡の調査が行われ、白浜式期の竪穴住居跡が12軒検出された。遺構同士が重複していることから、複数時期にまたがっていると考えられている。平面形は隅丸長方形が主体で、住居跡内から炉は検出されていない。また、長軸13ｍの大型住居跡１軒が検出されている。また、平成元年に弥栄平(7)遺跡の調査が行われ、竪穴住居跡１軒が検出された。

平成６年には六ヶ所村鷹架遺跡の試掘調査が行われ、早期中葉の物見台式期の竪穴住居跡１軒が検出された。平成６・８年には、福地村西張(3)遺跡・西張(2)遺跡の調査が行われ、西張(3)遺跡では早期の竪穴住居跡１軒、配石遺構１基が発見された。西張(2)遺跡では早期中葉白浜式期の竪穴住居跡が６軒検出された。平成８年には六ヶ所村幸畑(1)遺跡の発掘調査が行われ、早期中葉白浜式期の竪穴住居跡が２軒検出された。平成10年には八戸市櫛引遺跡の発掘調査が行われ、早期中葉鳥木沢式の竪穴住居跡５軒と捨て場が検出された。規模は５ｍ前後の不整円形・楕円形主体で炉は地床炉でこの内２軒から検出された。早期中葉の遺物の中にはミニチュア土器・蓋(ふた)形土器・スプーン形土製品等を含む。

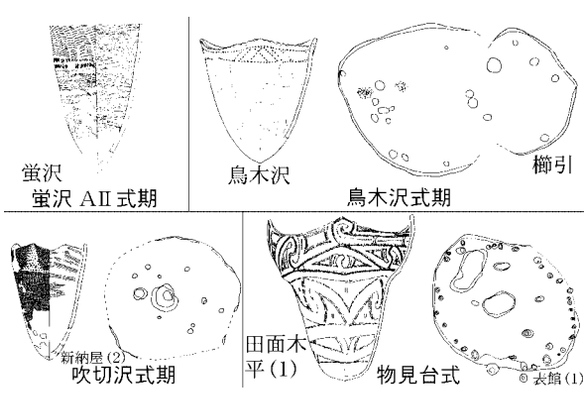
これらの他にも県内で行われた調査の主な成果を述べる。県で行った試掘調査をもとに、昭和55・56年に八戸市教育委員会が調査した長七谷地２号・８号遺跡では早期後葉の竪穴住居跡が多数検出され、長七谷地２号遺跡では14軒、長七谷地８号遺跡では８軒検出された。(注1) 昭和62年には三沢市教育委員会で根井沼(1)遺跡の発掘調査が行われ、早期中葉の竪穴住居跡２軒が検出された。この内１軒は根井沼式期のもので、径2.27ｍの不整円形である。遺物は、早期中葉の土器、石錘等の石器、他、土偶も出土した。(注2) 昭和63年に八戸市教育委員会で赤御堂遺跡の発掘調査が行われ、早期中葉から後葉にかけての竪穴住居跡４軒とほかに貝殻・魚骨ブロックを18箇所検出した。(注3) 昭和63年・元年に調査が行われた見立山(2)遺跡では早期前葉の日計(ひばかり)式竪穴住居跡２軒が検出された。また、平成７～９年の調査でも同遺跡で早期前葉の竪穴住居跡２軒、早期後葉の竪穴住居跡４軒が検出された。(注4･5) 日計式期の竪穴住居跡は2～3ｍ台の不整円形が主体で、炉は検出されていない。この時期の集落跡として注目される。平成10年には館平遺跡の調査が行われ、寺の沢式期の竪穴住居跡１軒が検出されている。(注6)

上記に挙げた遺跡の中でも、見立山(2)遺跡・中野平遺跡・長七谷地貝塚・売場遺跡・表館(1)遺跡のように各型式の竪穴住居跡が集落単位で発見されたことは意義が大きい。また、中野平遺跡では長軸13ｍを越える大型住居跡が検出されたことにより、早期の集落構造を考える上で重要な遺跡である。

土坑

土坑は、フラスコ状土坑のほか、落とし穴として報告されているものが多い。また、これまで墓としての報告された例はないが、これは人骨の発見がなく、土坑墓群等、まとまった検出例がないために、これまで見逃されてきた可能性もある。

最近、「墓」と認定するための要素をいくつか満たしている土坑を見直し、積極的に墓の可能性を探る動きもあり、(注7･8) ここで紹介された「土



早期中葉の土器と竪穴住居跡

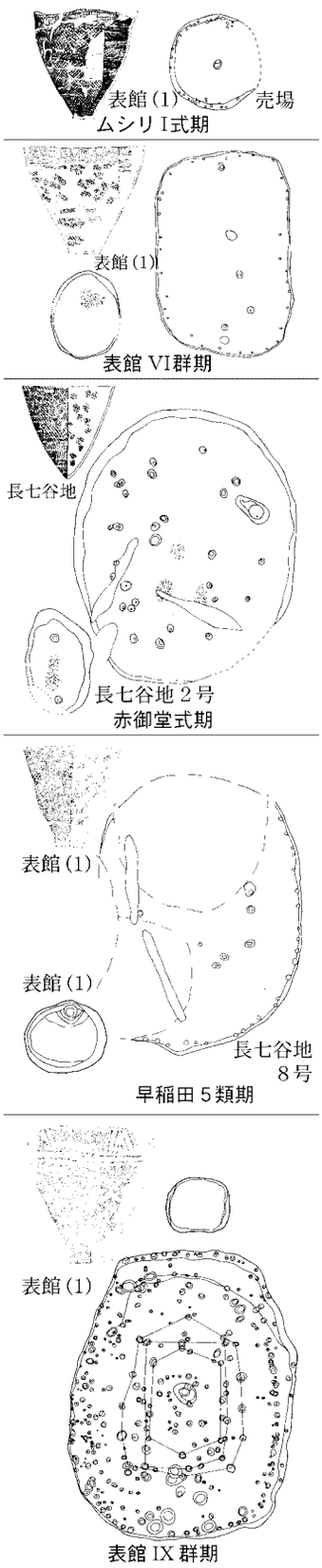
坑墓」について記述する。表館(1)遺跡（昭和62年調査）では、平面形態は楕円形・方形主体で、長軸1.7～2.4ｍ程で、遺物は土器２個体分が出土したものや配石を伴うものもあり、時期は早期後葉～末葉である。新納屋(2)遺跡（昭和54年調査）では不整楕円形・不整円形主体で、長軸0.6～2.4ｍの範囲で、土器の他に石錘を伴うものが多く、時期は早期中葉である。このほかの遺跡などでも「土坑墓」としての埋葬類型に該当する土坑が見られるが、その性格上、時期決定が困難なものもあり、遺跡名を列挙するに留める。しかしながら、これを積極的に判断するならば、「早期後半には墓制の諸要素の大半が出揃っている。」状態であり、早期は墓制の発展段階といえよう。今後の資料の増加を期待したい。

このほか、早期の遺構で竪穴住居跡以上に検出される遺構に円形の落とし穴がある。これは八戸市鶉窪（うずらくぼ）遺跡（昭和56年調査）で検出され、県内で初めて明らかにされた。これによると、落とし穴の形態は平面形が円形で、断面形が擂（す）り鉢・漏斗（ろうと）状に近い土坑である。規模は小型から大型まで様々であるが、中には土坑底面に小ピットを穿ち、杭跡の施設を持つものもある。遺構内からは構築年代を決定づける遺物がほとんど出土しないが、堆積状況を加味すると、縄文時代早期後半から前期初頭に位置づけた。また、鶉窪遺跡で検出された落とし穴は16基あり、そのうち15基は埋没沢の両岸に立地し、その一部は等高線に沿うような形で一定の間隔を持ち配列されている。

これ以降、円形の落とし穴は多くの遺跡で検出され、落とし穴として認識され、昭和55年以降は次の遺跡から検出されている。（八戸市鴨平(1)・三沢市小田内沼・八戸市弥次郎窪（１次）・南郷村畑内（１次）・名川町日渡・西張(3)（１次）・十和田市寺山(3)・十和田市平窪(2)・六戸町長谷・南郷村水吉・櫛引（１・２次）・八戸市岩ノ沢平遺跡）また、鶉窪遺跡の他に円形の落とし穴が一定の間隔を持った配列で検出された例は、小田内沼遺跡（昭和61年）、寺山(3)遺跡（平成８年調査）の７基、櫛引遺跡（平成９・10年調査）の13基などに見られる。

出土遺物

県内各地で遺物包含層の調査も行われ、早期の資料も20年の間に増加した。土器編年上新たに位置づけがなされた型式もある。昭和62年調査成果から、早期中葉には従来の白浜式・寺の沢式の中間に根井沼式の設定がなされている。これは、刺突の施文方法が白浜式と類似し、寺の沢式と貝殻腹縁文様に共通性が見られることによるものである。昭和62年の表館(1)遺跡の調査では縄文時代草創期から各時期の遺物が出土しているが、とくに、縄文時代早期後葉から前期前葉までの土



早期後葉の土器と小型・大型竪穴住居跡

器群は編年上大きな位置を占めることとなった。この中でも早期後葉の表館Ⅵ群はムシリⅠ式と赤御堂式の間に位置するものと考えられる。この群を４類に分類し、綾絡（あやくり）文－折り返し口縁－側面圧痕文－地文縄文とした土器群がそれぞれ強く関連しながら、赤御堂式へと推移してゆく過程をとらえた。売場遺跡の第Ⅶ・Ⅷ群土器もこれに相当する。また、早期末の表館Ⅸ群は従来の早稲田５類に後続し、表館Ⅹ群を経て長七谷地Ⅲ群に至る土器群と考えられる。早稲田５類との相違点を特殊縄文の消滅・側面圧痕の多用、器形・胎土に求めている。

昭和60年に八戸市教育委員会により、鳥木沢遺跡の調査が行われ、この成果に基づいて、早期中葉の鳥木沢式の名称が与えられた。蛍沢ＡⅡ式と近い時期と考えられるが、編年上の位置は確立していない。(注9・10)

次に各型式でこれまでの成果を述べる。日計式期には鴨平(1)遺跡（昭和56年調査）、八戸市見立山(1)遺跡（平成８年調査）、この土器は押型文の他に地文縄文に沈線文を施文するもの、地文縄文のみのもの等が存在すると考えられている。白浜式期は資料の増加が著しく、中野平遺跡・西張(2)遺跡、大鰐町鶴ヶ鼻遺跡（昭和62年調査）、六ヶ所村上尾駮(2)遺跡、六ヶ所村幸畑(1)遺跡等が挙げられる。鶴ヶ鼻遺跡は津軽地域でこの時期の土坑が検出されている。また、上北地域と南部地域では文様施文等に若干の違いが指摘されている。(注11) 吹切沢式期・物見台式期の土器編年はこれまで数多くの検討がなされてきたが未だに確立されてはいない。近年、吹切沢式－物見台式の編年に関わると思われる蛍沢ＡⅡ式・鳥木沢式などの資料も増加している。赤御堂式は長七谷地・赤御堂貝塚の調査により、従来の型式の前後に古段階・新段階と三段階にわたる変遷が認められている。

以上、この20年間の調査での大きな成果は、集落跡の広がりが確認されたこと、住居跡の資料が蓄積されたこと等である。これにより、早期の実像に迫ることが出来たが、同時に土器編年の確立・細分化など、今後検討すべき問題も残されている。

（挿図について：各型式で２軒掲載した竪穴住居跡は、大型・小型住居を掲載した。使用した実測図にはその遺跡名を付した。なお、実測図の一部は（注12）から転載した。また、土器の縮尺は不同で、竪穴住居跡は１/250である。）

（青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）